

## 法華玄義と法華玄論

### 一 法華玄義の撰号

天台の『法華玄義』（詳しくは『妙法蓮華経玄義』十卷は、羅什訳『妙法蓮華経』の経題を解釈しながら法華経の幽玄な義趣を述べたもので、『法華文句』『摩訶止観』とともに、いわゆる法華三大部と称されるものの随一である。この三大部のうち『摩訶止観』はさておいて、『玄義』と『文句』の二部はともに法華経一経の解釈で、前者は経の総題を、後者はその別文を釈し、両者相まって天台の法華経観を開顕したものである。したがって両者は、法華経によって一宗を建立した天台宗のいわば根本典籍ともいべきものである。

ところで、『法華玄義』の撰号は「天台智者大師説」となっているが、これは周知のように、天台大師智顛の講説を章安灌頂が記録したものとという意味である。このことは『法華玄義』に限らず、『法華文句』『摩訶止観』も含めて三大部い

平 井 俊 榮

れにも見られることで、本書が他の類書には見られない特異な性格を持った著作であることを示すものである。この「智顛説・灌頂記」という撰号の意味は、一般には智顛の法華経に関する講説を灌頂が筆録したという意味に解されている。しかし、これもまたよく知られた事実であるが、本書中には、しばしば「私謂」として筆録者灌頂の私見が書き添えてあるところから、「智顛説・灌頂記」という意味は、第二に、本書が智顛の講説部分と、いわゆる「私記」と称される灌頂の私見を書き添えた部分から成っているという意味にも解することができる。

この撰号に関する二つの解釈は、いずれも『法華玄義』が、智顛の真撰ではないにしても智顛の真説である、という前提に立っている。しかし、第一の、本書が智顛の法華経に関する講説をそっくりそのまま灌頂が筆録したものであるという解釈は、すでに第二に、筆録者自身の私見が書き加えられて

いるという事実からも否定されることであるが、智顛の法華經の講説自体は疑うべくもない事実であったとしても、灌頂の「私記縁起」にも「灌頂昔、建業に於いて始めて經文を聴き、次に江陵に在りて玄義を奉蒙す」(大正藏三三・六八一上)とあるように、灌頂がこれを筆録した時点より遙か昔のことであった。後世の天台宗では、この『玄義』の講説年時を開皇十三年(五九三)智顛五十六歳の時としているが、これとも十二世紀末の南宋代にいたってはじめて確立した説で、灌頂自身も講説年時については何ら記するところがないのである。仮りにこの講説が事実であったとしても、灌頂がこれを録したのは「私記縁起」からもうかがわれるように、灌頂晩年のことであって、到底、智顛の講説のままということは有り得ないことであろう。

さらに、第二に「私謂」という灌頂の「私記」部分だけが筆録者の書き加えたもので、他の講説部分についてはすべて智顛の真説であるという見方も、きわめて疑わしいのである。第一「私謂」というのは、多分に灌頂自身の文体上の傾向であって、佐藤哲英氏によれば、<sup>(2)</sup>灌頂自撰の『涅槃經疏』にも、三十回近く「私謂」という用例が見られるという。さらに同氏によれば、智顛の講説部分にも「天台師云」「師云」という表現が見られるなど、これらは「法華玄義が果たして智顛の著作なのか、それとも灌頂の著作なのかと思ひ迷うよ

うな表現であり、智顛の講説部分と灌頂の私記部分との間に、文体上の区別は到底つけ難いものがある。」<sup>(3)</sup>といわれている。

このように見てくると、『法華玄義』という著作は、後世の天台の伝説にいうように、いつ、どこで、智顛が『法華玄義』の講説を行ない、それを灌頂が筆録したとか、あるいは智顛の講説に灌頂が私見を加えた、などという性格のものではなく、智顛の全く預り知らぬところで、全篇これ灌頂が独自に創作し、自ら書き下ろした作品であるという疑いが強く持たれるのである。そうなると、『玄義』の「智者大師説」という撰号は、単に著者の灌頂が、若き日智顛の法華經の講席に侍し、その講説に基づいて本書が作られたという意味しか持たないことになってしまふのである。いづれにしても、「智者大師説」という撰号を持つ本書が、智顛の真撰でないことは勿論のこと、必ずしも智顛の真説ともいえないのではないかという疑念がますます強くなってくるのである。

## 二 吉蔵著作との関係

この問題に対して、一つの証拠を提供するものが、智顛や灌頂とは同時代人であった吉蔵の著作との関係である。吉蔵には、天台の『法華玄義』と『法華文句』の関係に相当する著述として、『法華玄論』十卷『法華義疏』十二卷がある。

前者は達意的に法華經の玄意を論じたもので、後者は經の隨文解釈である。吉藏におけるこの二書の関係は、智顛における『玄義』と『文句』の関係に非常によく似ている。ところで、智顛(五三八―五九七)、吉藏(五四九―六二三)、灌頂(五六―六三三)という三者の年代から考えれば、仮りに『玄義』と『文句』が智顛の著作であるとすれば、当然これが吉藏の『玄論』や『義疏』の中に引かれていいはずである。しかし、これら両者の法華註疏の相互の依用関係を見ると、智顛から吉藏への影響は皆無である。吉藏には比較的早い時期に作られた『玄論』や『義疏』のほかに、『法華統略』『法華遊意』『法華論疏』などがあり、晩年にいたるまで法華研究を継続し、著作を残している。しかし、後年に成立したこれら著作のいずれにも、天台の学説を参照し依用した形跡は見られない。逆に、両者の法華註疏においては、吉藏著作から智顛著作へと影響が顕著に見られるのである。これは、年代的に見て、智顛が吉藏の著作を参照するということは全く有り得ないことではないにしても、両者の傾向から察しても、その可能性はきわめて乏しいといわざるを得ない。したがって、『玄義』や『文句』に見られる吉藏説の援用というものは、ことごとく灌頂の責任に帰せらるべきものである。これは、前述のように、「智顛説・灌頂記」という天台の註疏の成立・性格からいって、別に異とするには当たらないこと

である。

問題は、天台註疏に見られる吉藏説の援用が、灌頂が書き添えた、いわゆる「私記」の部分にのみ見られる現象かというところ、そうではなくて、智顛の講説部分と目される中心的な文章の中にすら、随処にそれが見られるということである。これは『文句』において一層顕著な事実であって、その数も夥しいものがある。このことは、天台の法華註疏において、智顛の真説と目される、いわゆる講説部分というものが、文上の区別がつけ難い程灌頂の私記の部分とよく似ているのも当然で、これらはすべて灌頂その人が書いたことを意味している。これは、もともと智顛の講説というものがあって、それが全く痕跡をとどめない程、灌頂による加筆修正が施された結果そうなったものなのか、あるいは、私記と称される部分だけでなく、講説部分も含めてことごとく、灌頂自身の独自の創作であることを意味しているかのどちらかであって、いずれにしても、智顛の真説という性格は、きわめて曖昧なものとならざるを得ないのである。

### 三 玄義における吉藏説の引用例

『法華玄義』における吉藏著作の援用は、『法華文句』に比べれば格段に少ないことも事実である。しかし、『玄義』では、巻末に「記者私録」という灌頂自身の附記があり、そ

ここで吉蔵説を引いていて、灌頂が自らこのことを認めている点で注目される。すなわち『法華玄義』巻第十ノ下に、

記者私録ニ異同。有人引ニ釈論会宗品。拳ニ十大經。雲經。大雲經。法華經。般若最大。  
(大正蔵三三・八一一中)

とあるが、これは『法華玄論』巻第三に、

問。釈論解ニ問乘品ニ云。列ニ十種大經。所謂。雲經。大雲經。華手經。法華經等。是摩訶波若經於レ中最高ニ深大。  
(大正蔵三四・三八二中)

とある一文を引いたものである。そこで、灌頂の「私録」にいう「有人」とは吉蔵のことであって、灌頂は『文句』だけではなく、『玄義』においても『玄論』の吉蔵説を参照し、これに拠ったことがまず確認されるのである。<sup>(4)</sup>

この巻末の「記者私録」は、文字通り記者の灌頂が附記した部分であるから、たとえ文中に吉蔵説の引用が見られたとしても異とするに当たらないが、『玄義』中にはさらに、いわゆる講説部分と目される主要な部分においても、同様に、いくつか『玄論』の援用が見られる。例えば、

(1) 『玄義』巻第二ノ上(大正蔵三三・六九六中)の妙法の「妙」の解釈が、『玄論』巻第二(大正蔵三四・三七二下)の「釈名章」における「妙」の解釈と全く一致している点。

(2) 『玄義』巻第七ノ下(大正蔵三三・七七二上―下)にある「蓮華」の解釈中、旧解を引く部分と十六義を以て蓮華を解釈

する部分が、『玄論』巻第二(大正蔵三四・三七八中―三七九中)の釈蓮華、及び十六義を以て経を蓮華に喩える部分と完全に一致している点。さらに『玄義』は、この文の末尾で、第三に「経論を出す」と称して、『法華論』の十七名と『大集経』の解釈を連ねているが、これもそのまま『玄論』に見られるものである。

(3) 『玄義』巻第九ノ下(大正蔵三三・七九四下―七九五上)の「明宗」第三章第一の「宗体を簡ぶ」項で、法華の宗体に関して十二師の異説を挙げているが、これは、『玄論』巻第二(大正蔵三四・三七九中―三八一上)の「経の宗旨を弁ずる」項で、法華の宗体に関する十三師の説を列記したものである。の中から引いたものである。

以上は、『法華玄義』中に、明らかに『法華玄論』から引用されたものであることが、すでに判明している若干の例を摘記したものであるが、この『法華玄義』と『法華玄論』の関連については、『玄義』に『玄論』を参照し、これに基づいて書かれた部分のあることを最初に指摘したのは、恐らく、鎌倉時代の学僧・宝地房証真の『法華玄義私記』であったと思われる。湛然の『法華玄義積籙』には、まだこのことは明確に意識されていない。証真は、例えば前述の「記者私録」の吉蔵説の引用については、『私記』巻第十に、

玄に有人、釈論の会宗品を引く等とは、此の下は、嘉祥玄論の第

三を引く。次に有人会して云わくより、故に知んぬ大なりに至るまでは、嘉祥の、般若最大を会する文なり（後略）。

（日仏全書二一・三八〇上―下）

と述べている。また、前述したその他の箇所についても同様の指摘を行なっている。<sup>(5)</sup>

さらに江戸時代の普寂の『法華玄義復真鈔』にも、随処にその指摘が見られる。<sup>(6)</sup> 普寂には、証真の『私記』をよく見ていた形跡がうかがえるので、証真の説を参照したものである<sup>(7)</sup>。この『私記』や『復真鈔』を参照した上でのことと思われるが、佐藤哲英氏の『天台大師の研究』には、前述した『玄義』と『玄論』の依用関係について、比較的詳しい論考が見られる。<sup>(8)</sup>

そこで前述した四例については、すでに先学によって指摘されているので、改めて論評することは避けたいが、このほかにも、明らかに『玄義』中の講説部分と思われる箇所、『玄論』の文を参照し、これに基づいて『玄義』が書かれていることが確実と思われるものを一例だけ挙げ、両者の全文を比較対照することによって、『玄義』における『玄論』援用の実態を見てみたいと思う。それは『玄義』巻第八の「顕体」と『玄論』巻第四の関係である。なお、これについては、証真・普寂ならびに佐藤氏において、いずれも見落とさされているもので、しかも一經の宗旨を論じた重要な項目なの

で、とくにこれを取り上げてみたのである。

#### 四 玄義巻第八と玄論巻第四

—本文対照—

『法華玄義』十巻の大綱は、一釈名二弁体三明宗四論用五判教の五章（五重玄義）に開いて法華經の内容を総括的に概論しているが、巻第八は、その第二の「弁体」の冒頭部分に相当している。「弁体」とは「今は頓に要理を点じて正しく經体を顕わし、直ちに直性を弁ず」（大正藏三三・七七九中）とあるように、一經所詮の理、經の体を弁出したもので、經の宗旨を明らかにした第三の「明宗」とともに、法華經の宗要を説く重要な部分である。

『玄義』はこの「弁体」を略して七条に開いているが、その第一が「正しく經体を顕わす」段である。これはさらに四つに分けられ、その第一が「旧解を出す」となっている。旧解を出すに当たって『玄義』は、まず六人の「有人説」を挙げ、次いで五論を挙げているが、このうち「有人説」の三説までが『玄論』に説く吉藏自身の説であり、残る三説のうち、二説も明らかに『玄論』の別の箇所（巻第二）に相当文を見出すことができるし、文中に引く五論の内容もことごとく『玄論』からの援用である。したがって、「顕体」四意のうち、第一の「出<sub>二</sub>旧解<sub>一</sub>」に関しては、文中に簡単な灌頂の

「私謂」が挿入されているものの、そのほとんどが『玄論』に依拠して作られたものである。

以下、この点を『玄義』巻第八と『玄論』巻第四の本文の比較対照によって明らかにしてみたい。なお、対照文のう

### 法華玄義 卷第八ノ上

④正顯<sub>レ</sub>体。更明<sub>二</sub>四意。一出<sub>二</sub>旧解。二論<sub>二</sub>体意。三正明<sub>レ</sub>体。四引<sub>二</sub>文証。北地師用<sub>二</sub>一乘<sub>二</sub>為<sub>レ</sub>体。此語奢漫未<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>簡要。一乘語通濫<sub>二</sub>於權實。若權一乘都非<sub>二</sub>經意。若實一乘義該<sub>二</sub>三軌。顯<sub>レ</sub>体不<sub>レ</sub>明故不<sub>レ</sub>用。又有解言。真諦為<sub>レ</sub>体。此亦通濫。小大皆明<sub>二</sub>真諦。小乘真諦故不<sub>レ</sub>俟<sub>レ</sub>言。大乘真諦亦復多種。今以<sub>二</sub>何等真諦為<sub>レ</sub>体故不<sub>レ</sub>用。又有解言。一乘因果為<sub>レ</sub>体。今亦不<sub>レ</sub>用。何者一乘語通已如<sub>二</sub>前說。又因果二法猶未<sub>レ</sub>免<sub>レ</sub>事。云何是体。事無<sub>二</sub>理印則同<sub>二</sub>魔經。云何可<sub>レ</sub>用。

(大正藏三三・七七九上)

④この段は直接『玄論』巻第四に相当文を見出し難い。しかし『玄論』巻第二に「第四弁<sub>二</sub>經宗旨」(大正藏三四・三七九中―三八一上)があり、そこで『玄論』は、法華經の宗旨に關して十三家の説を列している。その一部がここに引かれているのである。

すなわち④については『玄論』に、

第一遠師云。此經以<sub>二</sub>一乘<sub>二</sub>為<sub>レ</sub>宗。

法華玄義と法華玄論(平井)

ち、『玄義』は「正顯体」の第一「出<sub>二</sub>旧解」の全文で連続しているが、対応する『玄論』の文は中略もあり、必ずしも連続していない。

### 法華玄論 卷第四

とある。この遠師とは、淨影寺慧遠のことである。そこで『玄義』はこれを「北地師」と言い換えたものと思われる。また「宗」が「体」に変わっているが、後述するように、『玄義』は「顯体」に続いて巻第九の chapters 第三に「明宗」を説き、その第一に「宗体を簡ぶ」として再びこの『玄論』の「弁經宗旨」を援用している。そこでは逆に、『玄論』に「体」とあるものをすべて「宗」に統一している。<sup>9)</sup> 宗体一異については

『玄義』にも別に論ずるところがあるが、<sup>(10)</sup>ここでは『玄義』は宗と体を同義語と見做し、「弁体」に関してはすべて「体」に、「明宗」に関しては「宗」というように、整合性を期したものと思われる。

⑩については、『玄論』の十三家の説のいずれにも該当するものがない。別に典拠があるのか、それとも『玄義』独自の挿入なのか、とにかくこれだけが異質である。

⑪の「有解」は光宅寺法雲の『法華義記』<sup>(11)</sup>の説である。すなわち『玄論』巻第二に、

第五光宅法師受三学印公之経。而不<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>印公之积<sub>一</sub>。云<sub>レ</sub>此経以<sub>二</sub>一乗因果<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>宗。  
(大正蔵三四・三八〇上)

とあり、これを引いたものと思われる。

なお、前述のように『玄義』は巻第九の「明宗」第三において、再び「宗体を簡ぶ」第一としてこれらの説を引いている。すなわち

玄義巻第九ノ下

○遠師以<sub>二</sub>一乗為<sub>レ</sub>宗。所謂妙法引<sub>レ</sub>文云。是乗微妙為<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>上。(大正蔵三三・七九四下)

玄論巻第二

○第一遠師云。此経以<sub>二</sub>一乗為<sub>レ</sub>宗。一乗之法所謂妙法。如<sub>二</sub>譬喩品云<sub>一</sub>。是乗微妙清浄第一。於<sub>二</sub>諸世間<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>上。

○光宅用<sub>二</sub>一乗因果<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>宗。前段為<sub>レ</sub>因後段為<sub>レ</sub>果。  
(大正蔵三三・七九四下)

(大正蔵三四・三七九中—下)  
○第五光宅法師受<sub>二</sub>印公之経<sub>一</sub>。而不<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>印公之积<sub>一</sub>云。此経以<sub>二</sub>一乗因果<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>宗。故経有<sub>二</sub>兩段<sub>一</sub>。初開三頭一以明<sub>レ</sub>因。後開近頭遠以弁<sub>レ</sub>果也。  
(大正蔵三四・三八〇上)

とある。『玄義』の文はいずれも抄略した形になっているが、すべて『玄論』に拠っていることは明らかである。これを今の巻第八の「顕体」に比べると、個人名を挙げ、さらに巻第八よりも詳しくなっている。しかし、まぎれもなく同一の文脈であり、『玄義』は「顕体」と「明宗」の二度に亘って、慧遠と光宅の説を『玄論』から借用した形になっている。

なお、『玄義』の「明宗」第三に述べられる十二師の説は、すべて『玄論』の「弁経宗旨」に紹介される十三家の説に基づいて書かれていることは、すでに述べた通りである。したがって、ここでは単に第一師と第五師の説が、巻第八の「顕体」と巻第九の「明宗」において、二重に引かれていることだけを指摘して、他の各師については比較対照することは略した。

⑫ <sup>①</sup>有人解乗体通<sub>二</sub>因果<sub>一</sub>。果以<sub>二</sub>万徳<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>体。因以<sub>二</sub>万善<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>体。  
引<sub>二</sub>三十二門論<sub>一</sub>云。諸仏大人所乗。文殊観音等所乗。又引<sub>二</sub>此

⑬ <sup>①</sup>次論<sub>二</sub>乗体<sub>一</sub>。問何以為<sub>二</sub>乗体<sub>一</sub>。答乗通<sub>二</sub>因果<sub>一</sub>。果乘以<sub>二</sub>万徳<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>体。因乘以<sub>二</sub>万行<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>体。問何以知<sub>レ</sub>通<sub>二</sub>因果<sub>一</sub>耶。答後当<sub>二</sub>

經。仏自住大乘即果也。諸子乘是宝乘。是因乘也。又引普賢觀大乘因果皆是実相。私問。因果之乗為變為不變。若變誰是能通。誰是所通。若不變因果則並。皆無此理。若別有法通因果。當知。因果非果者經體也。十二門論云。大人仏不行故名乗。豈応以不行証因果乗也。法華仏自住大乘者。此乃乗理以御人。非住果徳也。普賢觀明因果。皆指実相。云可將実相証於因果耶。今皆不用。  
(大正蔵三三・七七九上―中)

③『玄義』のこの段の「有人解」は、「旧解」六師のうち第四師で、これが『玄論』では一乗義に続いて乗体を論ずる冒頭の問答に相当している。したがってこれは『玄論』の吉蔵自身の説であることは自明で、『玄義』の「有人」は吉蔵にはかならない。『玄義』の文は「有人解」と断つてあるにも拘らず、かなりな抄略が見られる。  
①においては、果乗・因乗の乗の字が略され、また万行が万善に変わっている。

広説。今略取二文。十二門論以六義一釈乗。諸仏大人之所乗故故名為大。謂果乗也。觀世音等之所乗故故名為大。謂因乗也。此經云。仏自住大乘一如其所得法。以此度衆生。為果乗也。是諸子等乗是宝車。直至道場。謂因乗也。法華論具明乗通因果。後當出之。唯識論亦然也。問釈論云。六度為乗体。云何乗通因果耶。答此説因乗耳。広乗品中具明万徳万行也。問因乗之中云何本末。答六度雖是大乗体。要須波若正觀。由波若正觀万行方成。即波若為本。余行為末。此就乗体中自開本末。問同是無得六度皆是正体。有何本末。答若六度同是無得者。要須波若方成。無得。故波若為本。五度為末。小品云。鳥集須弥同一金色。雖同金色。而須弥為本。要由須弥。色乃同耳。  
(大正蔵三四・三八九中―下)

④では「引十二門論云」といいたが、必ずしも『玄論』通りではなくて、むしろ『十二門論』の要略になっている。  
⑤は法華經自身(13)の経証であるが、これもきわめて簡潔に要略されている。むしろ『玄論』では、経の「諸菩薩及声聞衆」が「諸子」に、「宝乗」が「宝車」になっているが、『玄義』は「諸子」については『玄論』をそのまま受け、「宝車」は経の原文通り「宝乗」になっている。



◎有人明。因乘以般苦為本。五度為末。果乘以薩婆若為本。余為末。又因乘狹果乘廣。又般若相心是一體乘。不相應心是異體乘。又無所得相應行是近乘。低頭拳手有所得是遠乘。又六度有三世出世雜是遠乘。三十七品但出世名近乘。又四句度与品悉無得。又度与品俱有得。又度雜品不雜。又品雜度不雜云云。私謂。般若為乘本者。於今經是白牛非經體也。薩婆若為乘本者。於今經是道場所成果。亦非乘體。因乘狹者是縱義。果乘廣者是橫義。悉非今經乘體。般若相心無所得近遠等。於今經悉是莊校儻從。都非乘體。那忽於皮毛枝葉而興諍論耶。喧怒如此誰能別之。

（大正藏三三・七七九中）

◎問因中之乘以波若為主。果地万德用何為宗耶。答論云因中名波若。果中名薩婆若。即果乘以薩婆若為主也。是故此經始末皆歎弘慧。如云下為說弘慧。故諸仏出於世。乃至多宝所歎平等大慧。即其事也。撰大乘論亦言智慧為乘體也。此是不二不開本末耳。因緣無礙一行撰一切行。皆得為因乘本。一一德撰一切德皆果乘本也。問法華具明因乘果乘。何者為正。答弁宗之中以說斯義。明正法為乘者此乘非因非果始是正也。今就方便用者以果乘為正。所以然者果是妙極因未妙極。經題稱為妙法。故宜以果乘為正也。以標此妙極之果。令下三乘人及一切衆生皆修妙因。趣此妙極之果。然後始得明因乘耳。若發趾即明因乘為正者。竟末標所期。知何所趣耶。如下人先知宝所然後修行趣之耳。以此而推果為正也。此義文已廣明尋之自見。後見法華論。積尚無二何況三耶。明下無有二乘涅槃。唯有如來大涅槃。名為弘果。故知二乘亦取果乘為正。大乘亦取果乘為正。是以論但拳涅槃也。問乘有弘狹義不。答五乘相望自弁弘狹。今不明之也。就一乘中自論弘狹者。果乘無累不。尽無德不。門故稱弘也。因行不爾故稱為狹。就因中自論者。初地得百法明門。故狹。二地得千法明門。故弘。如是可知也。問云何一體乘異體乘耶。答与波若相應無依無得不二觀現前。如念品說。菩薩一念具万行。此是一體乘。未得此觀現前

名異體乘。然從初發心一則學不二觀。故從初發心時一是一體乘。則一念具足万行。故云發心畢竟不二別。但約此觀明晦一故開二體異體耳。約位明者得無生忍一為一體乘。未得無生忍一者為異體乘。問何以然。答大品云但燃燈仏以得無生忍一即不離六度等無得万行。問云何是近乘遠乘。答以波若心一所起。如下不住法住波若中。無所捨一具足檀等六度。不生故具足道品。亦如下廣乘品列一切德行。後皆結言無所得故。如此之乘名為近乘。若說低頭拳手皆成仏一者。此是有所得善名為遠乘。何以知然。法華云下是乘微妙清淨第一。於諸世間為無有上。此豈是人天有所得善耶。今菩薩所行從初發心一即行無所得觀。此是近乘無有遠乘。但就無所得中一自有明晦一故分近遠耳。問積論解無生品中云。有近道遠道。近道者謂三十七品。遠道者謂六波羅蜜。然道品与六度一俱皆是乘。何故分近遠耶。答數論師地論師法華等師無有<sub>二</sub>此義<sub>一</sub>。故不<sub>レ</sub>積也。今明<sub>二</sub>此義<sub>一</sub>可有<sub>二</sub>四例<sub>一</sub>。一者六度道品是無所得故俱近。二俱是有所得故俱遠。三無所得六度為近。有所得道品為遠。四無得道品為近。有得六度為遠。今明<sub>二</sub>六度為遠道品為近者<sub>一</sub>。為積無生品經文。經文云有世間六度出世間六度。道品但明<sub>二</sub>出世<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>明<sub>二</sub>世間<sub>一</sub>。論主解<sub>二</sub>此一義<sub>一</sub>故明<sub>二</sub>六度為遠道品為近<sub>一</sub>。問六度何故遠道品何故近。答六度雜有<sub>二</sub>世出世<sub>一</sub>故遠。道品純是出世間故近。問六度何故雜道品何故不<sub>レ</sub>雜耶。答六

◎この段の『玄義』の「有人明」は「旧解」六師のうちの第五師で、これも『玄論』の関連する問答を取意して列記したものである。したがってこの第五師の「有人明」も『玄論』の吉蔵説であることは明らかである。『玄論』ではかなり長文で、多岐に亘っている問答を、『玄義』はきわめて抄略した形で引いている。したがって誤解や錯乱の跡が見られ、文尾の「云云」によってもわかるように、引用文もしくは第三者の説の紹介としてみても、きわめて不充分である。

①の『玄論』の意味は、因乗は般若を主となし、果乗は薩婆若を主となす、というものである。これは『大智度論』の「因を般若と名づけ、果を薩婆若と名づく」（大正蔵二五・一三九下）というに拠ったものである。しかるに『玄義』では、因乗については般若を本とし、五度（五波羅蜜）を末となすといひ、果乗については薩婆若を本となし、余を末となすといひ、本末に開いている。これは『玄論』の後文に「不二の二に本末を

度中明<sub>レ</sub>通<sub>ニ</sub>浅深<sub>一</sub>。如<sub>ニ</sub>布施持戒忍辱等<sub>一</sub>通<sub>ニ</sub>於浅深<sub>一</sub>。可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>雜義<sub>一</sub>。道品中明<sub>ニ</sub>定慧<sub>一</sub>。定慧深<sub>ニ</sub>於施戒<sub>一</sub>。就<sub>ニ</sub>此一義<sub>一</sub>故六度為<sub>レ</sub>遠道品為<sub>レ</sub>近。問此義約<sub>ニ</sub>大小乘<sub>一</sub>分<sub>ニ</sub>近遠<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>不。答若就<sub>ニ</sub>大小乘<sub>一</sub>一往分者。道品是小乘行故為<sub>レ</sub>遠。六度正是乘体故為<sub>レ</sub>近。若就<sub>ニ</sub>菩薩具<sub>一</sub>一切行。皆是無得。悉是正行。六度道品俱是近乘也。  
（大正蔵三四・三八九下—三九〇中）

開くのみ」と述べてあるものを参照したと思われる。また、薩婆若の本に対して末の「余」とは何を指すのか曖昧である。

◎は、『玄論』が一乗中に自ら広狭を論ずる趣旨を、結論だけ出したものである。

◎も同様で、『玄論』では般若と相應する無依無得の不二の觀の現前することを一体乗といひ、未だ不二の觀が現前しない場合を異体乗と名づくといっている。これを『玄義』は般若相應心と不相応心とに要約している。

◎以下は、『玄論』ではすべて近乗と遠乗に関する問答である。最初の◎は、『玄論』の意趣は、『大品般若経』広乘品<sup>(14)</sup>を典拠に無所得の行を近乗に、また法華経に「低頭举手皆成仏す<sup>(15)</sup>」と説く有所得の善を遠乗と名づくといっている。『玄義』はこれを簡潔に要約している。

◎は、この近乗と遠乗を六波羅蜜と三十七道品に配当する問題で、これは『玄論』◎の冒頭にいうように、『大智度論』

積無生品<sup>(16)</sup>を典拠としたものである。ここですす『玄論』は、六波羅蜜には世間の六度と出世間の六度があるから遠乗で、三十七道品はただ出世間のみあるから近乗であるといっている。<sup>(17)</sup>『玄義』がこれを要約したのは自明であるが、さらに、『玄義』は「六度には世と出世の雜有り。是れ遠乗なり」といって、「雜」の一字を加えている。これは単に『玄義』が諷意的に雜の字を加えたのではなくて、『玄論』が次の問答で「六度は雜えて世出世有るが故に遠なり」と称している問答をも参照し、これを援用したためであると思われる。

○以下『文句』は四句分別を試みている。しかし、ここには無得と有得のほかに、雜・不雜という二種の対立命題を同時に論じているから、四句分別の態をなしていない。○において、なぜ『玄義』が「又四句有り」と有人説（吉蔵説）を紹介したかといえば、『玄論』の○に「今此の義を明かすに四例有るべし<sup>(18)</sup>」といつて、六波羅蜜と三十七道品に、それぞれ近乗と遠乗となる場合を四例挙げているからである。その範例の基準となるのが無得と有得である。すなわち、どちらも無得の場合は「俱近」、有得の場合は「俱遠」である。また、無得の六度は「近」で、有得の道品は「遠」であるが、その逆の無得の道品は「近」で、有得の六度は「遠」である、というものである。『玄義』の○は単にこれ無得と有得に分類しただけなのである。

このような錯乱乃至破綻を来した理由は、一に○以降の文脈はすべて『玄論』にあつては、一乗において近乗と遠乗の違いのある所以を、種々の角度から論じたものであるのに、『玄義』はこれを理解せず、断片的に文章の一部を採用し、これを各箇別別の問題として羅列しているからなのである。したがって、例えば○の文脈は、『玄論』では「六度は何故雜で、道品は何故不雜であるか」という、前述の四例とは別箇の問題として提起されているが、『玄義』はこれを簡単に四句の中に組み入れているのである。

また、○の「品は雜で、度は不雜である」という『玄義』の文は、○を機械的に逆にしただけで、『玄論』の如何なる箇所にも、三十七道品が雜で、六波羅蜜は不雜であるという文章はない。そもそも六波羅蜜は、世間と出世間に共通の徳目であるから雜であり、道品は出世間のみあるから不雜である、というのが『玄論』の説である。『玄論』の○は、これを改めて問うて、六度は浅深に通ずるから雜であり、道品は道慧を明かすから、施戒より深く不雜であるといひ、改めて道品の近乗、六度の遠乗を確認しているのである。

「有人明」とある以上、要略するにしても無理に改竄する必要は毛頭認め難いのであるが、むしろ文尾の「云云」という常套句からも考えられるように、『玄論』の文意を曲解し、收拾がつかなくなった挙句、忽々に端折ったものと思われる。

①有人引①「積論」。以②六度③為④乘⑤體。方便運⑥出生死。慈悲運⑦取衆生。於⑧今經⑨一般若是牛。五度是莊校。方便是懷從。慈悲是軒亦非⑩乘⑪體。」

（大正藏三三・七七九中）

①この段の『玄義』の「有人」は、旧解六師のうち第六師に相当し、これが『玄論』では「運出義」（本稿では中略）に続いて「乗具」を論ずる項に当たっている。文中①の『大智度論』

①次論②乘具。問世間乘有③能乘之人及所乘之法及乘行具。一乘亦有④此不耶。答有也。大品云是乘及所乘因法。積論云六度正是乘體。慈悲与⑤方便⑥此二為⑦大乘挾具。所以然⑧者。以⑨有⑩慈悲⑪故能⑫廣運⑬衆生。有⑭巧方便⑮故能⑯出生死。又有⑰慈悲⑱故不⑲隨⑳二乘地。有㉑方便㉒故不㉓隨㉔凡夫地。出㉕此二地㉖故能㉗至㉘仏也。故此二種名㉙乘行具也。猶屬㉚一乘㉛攝。但義分㉜之故成㉝二也。小乘法中無㉞此行具也。

（大正藏三四・三九〇中一下）

②又此經明③乘有④三事。一車二牛三賓從。車通⑤因果⑥万徳万行。牛亦通⑦因果。中道正觀離⑧斷常之垢⑨為⑩白。由⑪此觀⑫故引⑬万行⑭出生死⑮如⑯牛。此即波若導⑰衆行⑱義也。問波若即是車云何復喻⑲牛耶。答一法二義分⑳之。導引如㉑牛運義名㉒車。余行但有㉓資成運出。唯有㉔車義㉕而無㉖引導之能㉗故無㉘牛義㉙也。此是因地牛義也。果地牛者内徳則取㉚真慧㉛為㉜牛。外用宜取㉝六通無垢㉞為㉟白牛。駕㊱之而遊㊲五道㊳運㊴衆生㊵也。賓從者果徳為㊶車。則因為㊷賓從㊸因行為㊹車。則界外衆行為㊺車。界内行為㊻賓從。如㊼索車中積㊽之。

（大正藏三四・三九一上）

は、「積摩訶衍品」<sup>19)</sup>の取意で、慈悲と方便の二は大乗の挾具であるという『玄論』の文は、むしろ吉蔵の敷衍であろう。『玄義』はこれを省いている。そしてその説明で『玄論』は

慈悲が能く衆生を運び、方便が能く生死を出だす、といっているのを、『玄義』は順序を逆にし、方便については運出生死、慈悲については運取生死とまとめている。

さらに㊸になると、有人説の延長なのか、『玄義』自身の説なのか、甚だ紛らわしい文脈である。『玄論』では、釈論の引用に続くいずれの箇所にもこの相当文を見出すことができないからである。しかし、これは後述する㊸以降で、五論を引いて乗義を論ずる最後に、法華経を挙げて『玄論』㊸の一文を採ったものと思われる(本稿では便宜上ここへ持って来て対校した)。ここで『玄論』は「乗を明かすに三事有り」といって、車と牛と賓従の三事を以て乗を説明している。これは経の「譬喩品」<sup>(20)</sup>に大白牛車、つまり大白牛と宝車と儂従を以て一仏乘に譬えているのを引いたものである。ここで『玄論』は、般若の衆行を導く義が牛に喩えられ、余行(万徳万行)には導引の義がなく、ただ資成運出の義のみあるのを車に喩えている。

『玄義』が「般若は是れ牛なり」といっているのはわかるが、次の「五度は是れ莊校なり」といっているのは、『玄論』が「余行」(万徳万行)を「車」に喩えているが、この余行を狭く般若以外の五波羅蜜に限定したためであろう。さらに「車」を「莊校」と言い換えているのは、同じ「譬喩品」の長行に、「各賜諸子等一大車。其車高広衆宝莊校」(大正蔵九

・十三下)とあるところから、「莊校」を取って車に代えたものであろう。しかし、これは今の「譬喩品」の趣旨からいって甚だしくはずれである。

また、儂従が方便の譬であるというのは、『玄論』には全く見られない表現である。『玄論』では、果徳を車となすときには、因を賓従となし、因行を車となすときには、界内の行を賓従となすといっている。どこにも方便の語は見られない。また慈悲は「軒」であるといっているが、「軒」の譬は「譬喩品」には全く存在しない。これは㊸において『玄論』が、『大智度論』を引いて六度が乗の体であるとする、慈悲と方便は乗の挾具であると述べていたのに関連して、方便と慈悲についても無理に関説しなければならぬと考えたからであろう。そこで、方便については儂従を当て、慈悲については経文に全く存在しない軒を以て譬えたのである。そして、これらはいずれも「亦非乗体」といっているが、『玄論』では広く「乗具」について論じていることなので、これは全くの蛇足である。

この項は、「有人説」の引用と見た場合、甚だしく曲解して真意を正しく伝えていないし、もし、「有人説」の引用は釈論を引く前半の㊸だけで、後半の㊸の部分では、『玄義』自身が法華経の経文を引いて反論しているとも見ても、その骨子となる点はすべて『玄論』から借りていることは上述の通り

であり、むしろ自説と見た場合、独創性も正当性もない、き

① ⑤中辺分別論云。乗有レ五。一乗本謂真如仏性。三乗行謂福慧。三乗撰謂慈悲。四乗障謂煩惱。是煩惱障行解等是智障。五乗果謂仏果也。  
（大正蔵三三・七七九中）

⑥ 唯識論云。乗是出載義。由真如仏性一出福慧等行。由此行一出仏果。由仏果一載出衆生。  
（大正蔵三三・七七九中―下）

⑦ 摂大乘論乗有レ三。一乗因謂真如仏性。二乗縁謂万行。三乗果謂仏果也。  
（大正蔵三三・七七九下）

わめて杜撰な解釈であるといわざるを得ない。

① ⑤次中辺分別論明乗有レ五。一乗本謂真如仏性。二乗行即福慧等。三乗撰謂慈悲心。引一切衆生悉共出生死。四乗障謂煩惱障及智障。三界内煩惱名煩惱障。余障一切行解一名為智障。五者乗果即仏果也。  
（大正蔵三四・三九〇下）

⑥ 唯識論解乗有レ三體六義。三體同前。一自性二空所顯真如是也。二隨流隨順自性一流。福慧十地等法是也。三至果即隨流所出無上菩提。及一切不共法也。六義者一体是如如空出離四誘。二者因謂福慧。三者撰撰一切衆生。四境界了真俗一脩二諦。五障即皮肉心三障。六果謂無上菩提。此六義次第者正以真如為根本。以有如此故起福慧二行。起福慧二行故能撰一切衆生。撰一切衆生由照真俗迷境。故成惑則失乘理。見境故能除惑。除惑故得仏果也。  
⑦ 問乗は何義。答彼論釈云。乗是顯載義。由真如仏性一出福慧等行。由福慧等行一出仏果。仏果載出衆生。  
（大正蔵三四・三九〇下）

⑦ 摂大乘論有レ三。謂乗因乗縁乗得。乗因者謂真如仏性。第一義空為乗因。乗縁謂万行。乗得即仏果也。問真如仏性云何為乗体也。答唯有真如仏性為真実。修万行為欲顯此仏性。仏性顯故名法身。此三要相須。以仏性は本

⑤ 法華論明<sub>二</sub>乘体<sub>一</sub>。謂<sub>二</sub>如来平等法身<sub>一</sub>。又云。如来大般涅槃。此兩文似<sub>二</sub>如隱顯<sub>一</sub>耳。發心低頭挙手等名<sub>二</sub>乘縁<sub>一</sub>。

(大正蔵三三・七七九下)

⑥ 十二門論明<sub>二</sub>乘本<sub>一</sub>。謂<sub>二</sub>諸法実相<sub>一</sub>。謂<sub>二</sub>般若<sub>一</sub>。謂<sub>二</sub>乘助<sub>一</sub>。謂<sub>二</sub>一切行資成<sub>一</sub>。乘至。至<sub>二</sub>薩婆若<sub>一</sub>。此五論明<sub>二</sub>乘体<sub>一</sub>。同而莊按小異。於<sub>二</sub>今經<sub>一</sub>明<sub>二</sub>乘体<sub>一</sub>。正是実相不<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>莊按<sub>一</sub>也。若取<sub>二</sub>莊按<sub>一</sub>者。則非<sub>二</sub>仏所乘乘<sub>一</sub>也。

(大正蔵三三・七七九下)

⑦ 『玄義』の「出<sub>二</sub>旧解<sub>一</sub>」中に紹介される六師の「有人説」が、吉蔵自身の三説を含めて、五師まで『玄論』からの援用であることは、すでに見て来た通りであるが、前述したように、この点については、証真・普寂等の著書にも何ら関説されてない。ただ、普寂は、旧解六師のうちの最初の三師

故名為<sub>レ</sub>因。雖<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>因復須<sub>二</sub>縁因<sub>一</sub>。因縁具故得<sub>レ</sub>果。今不<sub>レ</sub>違<sub>二</sub>此説<sub>一</sub>也。

(大正蔵三四・三九〇下—三九一上)

⑧ 法華論亦明<sub>二</sub>三種<sub>一</sub>。一乘体。謂如来平等法身即是仏性為<sub>二</sub>乘体<sub>一</sub>。又云仏乗者謂如来大般涅槃。此即明<sub>二</sub>仏果<sub>一</sub>為<sub>二</sub>乘体<sub>一</sub>。此隱顯為<sub>レ</sub>異実無<sub>レ</sub>兩也。又釈汝等所行是菩薩道。及低頭挙手之善発<sub>二</sub>菩提心<sub>一</sub>修<sub>二</sub>菩薩行<sub>一</sub>。即是了因乃為<sub>二</sub>乘縁<sub>一</sub>也。此猶是三種仏性義耳。乗縁謂引出<sub>二</sub>仏性<sub>一</sub>即了因也。乘体謂因<sub>二</sub>仏性<sub>一</sub>。乗果謂果<sub>二</sub>仏性<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>説<sub>二</sub>果果性<sub>一</sub>者。果果性還屬<sub>二</sub>果門<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>説<sub>二</sub>境界性<sub>一</sub>者屬<sub>二</sub>因門<sub>一</sub>故也。又広説有<sub>レ</sub>五。略即唯三也。

(大正蔵三四・三九一上)

⑨ 又望<sub>二</sub>十二門論<sub>一</sub>乗具<sub>二</sub>四事<sub>一</sub>。一者乗本。謂諸法実相。由<sub>二</sub>実相<sub>一</sub>生<sub>二</sub>波若<sub>一</sub>故実相為<sub>レ</sub>本。即是乗境義。二者乗主。由<sub>二</sub>波若<sub>一</sub>若<sub>二</sub>故<sub>一</sub>万行得<sub>レ</sub>成故波若為<sub>レ</sub>主。即智慧。三者乗助。除<sub>二</sub>波若<sub>一</sub>外余一切行資<sub>二</sub>成波若<sub>一</sub>。四者乗果乗<sub>二</sub>此乗<sub>一</sub>故得<sub>二</sub>薩婆若<sub>一</sub>也。

(大正蔵三四・三九一上)

が、前述したように、『玄論』巻第二の「弁経宗旨」中に出<sub>二</sub>づる十三家の説に該当するやの予測は持っていたようである。<sup>(21)</sup>しかし、普寂も、第四師以降の三師が『玄論』の吉蔵説であることは、気付いていなかったし、また、この段以降に引かれる『中辺分別論』以下の五論は、灌頂がこれを独自に引用



したものを見做している。<sup>(22)</sup>これは、湛然の『法華玄義釈籤』も同様である。<sup>(23)</sup>湛然は、大体この「出<sub>二</sub>旧解<sub>一</sub>」全篇がことごとく『玄論』に拠っていることに全く気付いていない。

④五論による論証の最初は『中辺分別論』であるが、この『中辺分別論』の引用文は、現行の藏経には見られない文章である。しかし、世親釈真諦訳の『撰大乘論釈』巻第十五に、次のような引用が見られ、吉蔵は恐らくこれに拠ったのではないかと思われる。すなわち、

中辺論説<sub>三</sub>乗有<sub>二</sub>五義<sub>一</sub>。一出離為<sub>レ</sub>体。謂真如。二福慧為<sub>レ</sub>因。能引出故。三衆生為<sub>レ</sub>撰。如<sub>二</sub>根性撰令<sub>三</sub>至<sub>レ</sub>果故。四無上菩提為<sub>レ</sub>果。行究竟至<sub>三</sub>此果<sub>二</sub>故。五三惑為<sub>レ</sub>障。除<sub>三</sub>此三惑<sub>二</sub>前四義成故。

(大正藏三一・二六五上)

とある体・因・撰・果・障の五義である。これを『玄論』は乗本・乗行・乗撰・乗障・乗果の五義として紹介している(乗障と乗果の順序が中辺分別論とは逆になっている)。「玄義」の引く所は、この『撰論釈』の引用に見るような『中辺分別論』の五義そのままではなくて、全く『玄論』の改変したものを引いていることがわかる。『中辺分別論』の現行本にこの該当文が見当たらないために、確定的なことはいえないにしても、『玄義』の引用が直接『中辺分別論』に拠っているのではなくて、『玄論』から孫引いたものであることは、この一事を以てしても明らかであろう。

なお、四の乗障について、『玄義』に抄略が見られるが、『玄義』に「四に乗障とは煩惱を謂う。是れ煩惱障なり。行解等は是れ智障なり。」というのは、乗障は煩惱障だけを指すかの如き誤解を招き易い文脈である。『玄論』は明白に、「四に乗障とは、謂わく煩惱障と智障なり。」といて、それぞれについて説明を加えている。

⑤の『唯識論』は、現存する『大乘唯識論』<sup>(24)</sup>や、その他の唯識関係のいずれの論書にも該当しないもので、現在欠本になっている真諦の著作と考えられているものである。<sup>(25)</sup>

『玄論』は、この『唯識論』に拠って一乗について三体六義を説いているが、『玄義』が引いているのは「乘是何義」という問の答として『唯識論』の解釈を『玄論』が引いている文尾の一節だけである。恐らく『玄論』が取意して挙げた『唯識論』の解釈を『玄義』はさらに要略したものと思われる。しかし、両者の文はほぼ一致している。

⑥の『撰大乘論』にいう乗の三義とは、前出の世親釈真諦訳『撰大乘論釈』からの引用である。すなわち巻第十五に、  
摩訶般若經説。乗有<sub>三</sub>三義<sub>一</sub>。一性義。二行義。三果義。二空所顯三無性真如名<sub>二</sub>性<sub>一</sub>。由<sub>三</sub>此性<sub>二</sub>修<sub>三</sub>十度<sub>一</sub>十地<sub>二</sub>名<sub>レ</sub>行<sub>一</sub>。由<sub>レ</sub>修<sub>三</sub>此行<sub>二</sub>究竟証<sub>三</sub>得常樂我淨四徳<sub>二</sub>名<sub>レ</sub>果<sub>一</sub>。

(大正藏三一・二六四下)

とある性義・行義・果義の三である。これを『玄論』は乗因・乗縁・乗得と称したものである。なぜならば、同じ吉

藏の著書『大乘玄論』卷第三「一乘義」(大正藏四五・四二中)に『法華玄論』と同じように乗の体を出すに当たって、「撰大乘論・中辺分別論・唯識論・十二門論・法華論」の五論を論拠として出している。順序は違いがまぎれもなく同一論書で、その引用も広略(法華玄論の方が詳しい)の違いがあるが、同一内容の引用文である。その『大乘玄論』では『撰大乘論』については「撰論云、性乗・行乗・果乗」といつている。すなわちここでは、前出の『撰論』卷第十五の性(義)・行(義)・果(義)と一致するのである。そこで『法華玄論』の①の乗因・乗縁・乗得の三義は、『撰論』の乗の三義を完全にアレンジしたものであることが知れる。『玄義』はこれをそのまま、「撰大乘の乗に三有り」として引いているのである。ただし、第三の「乗得」を「乗果」に変えているが、これは、原文により忠実たらんとしたのではなく、単なる諮意的な改変に過ぎないと思われる。したがって、②においても、既出の各論と同じように、原典から引いたのではなく、『玄論』を転写したものであることは重ねて明らかである。

一者乗体。謂如来平等法身。即是仏性。  
二者乗果。謂如来大般涅槃。  
三者乗縁。即是六度了因。

とある乗体・乗果・乗縁の三種である。

まず第一の乗体であるが、これは『法華論』に「一乗体者。所謂諸仏如来平等法身」(大正藏二六・七下)とあり、両者これに一致している。『玄論』の「即是仏性為乗体」というのは、むしろ吉藏の説明であって、これを欠いている『玄義』の方が原文に近いといえる。したがって乗体だけに關していえば、『玄義』が『法華論』の原文より『玄論』の方を参照したということにはならない。

しかし、第二の乗果になると事情は一変する。これは『法華論』には、

無二乗者。謂無二乘所得涅槃。唯有如来証大菩提。究竟満足一切智慧名大涅槃。非諸声聞辟支仏等有涅槃法。唯一仏乗故。

(大正藏二六・七中)

とあるが、これを『玄論』は「又云。仏乗者謂。如来大般涅槃」と要約したのである。『玄義』もこれをそのまま、「又云。大般涅槃」といつている。

さらに『玄論』はこの乗果を敷衍して「此れ即ち仏果を明かして乗体と為す。此れは隠顯を異と為すも、実には兩つ無きなり」といつているが、これは論には全く存在しない『玄

論』の解釈説明である。しかるに『玄義』は「此の兩文は如の隱頭に似たり」と文言を変えてはいるものの、『法華論』の引用としてか、あるいは自説としてかは不明ながら、ここに援用しているのである。この一事を以てしても、『法華論』の引用に關しても、『玄義』が『玄論』から転写していることは明白である。

第三の乗縁は、『法華論』に、

乃至童子戲聚沙為<sub>レ</sub>仏塔。如是諸人等皆已成<sub>レ</sub>仏道者。謂<sub>レ</sub>發菩提心<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>菩薩行者。所作善根能証<sub>レ</sub>菩提。非<sub>レ</sub>諸凡夫及決定声聞。本来未發菩提心中之所<sub>レ</sub>能得。如是乃至小低頭等皆亦如是。

(大正藏二六・七下―八上)

とある一文の要旨を採ったものであろう。『玄論』はこれを「低頭挙手の善も、菩提心を發せば、菩薩の行を修す」と要約し、この了因を乗縁となすのであると云っている。『玄義』はこれをさらに簡潔に「發心低頭挙手等を乗縁と名づく」といって、『法華論』↓『玄論』↓『玄義』という、簡略化の傾向をはっきり示している。

④の『十二門論』も全く原文にはない言葉である。強いていえば、前にも引いた「何故名為<sub>レ</sub>摩訶衍」に対する答の「大」の六義がそれに近いともいえるが、ここにいう四事は、到底その中の四つを抽出したというようなものではない。したがってこれも『十二門論』に基づいて吉藏が創作した類の

ものである。こうした傾向は『十二門論疏』の中にも片鱗をうかがうことができる。すなわち、「根本門」第三に、

問う、万行を因乗と為し、衆徳を果乗と為す。此の論は、但だ空義を明かすのみなるに、云何にしてか大乘を積せん。答う。此の論は乗の本を明かすなり。乗の本若し成ぜば、乗の義は則ち立つ。乗の本と云うは、謂わく諸法実相なり。斯の実相に契えば則ち般若を發生す。般若に由るが故に万行を導成し、皆な無所得にして能く動じ、能く出づ。故に名づけて乗と為す。

(大正藏四二・一七七上)

と述べている。ここで吉藏は、此の論(十二門論)は但だ空義を明かすだけなのに、どうして大乘を積することができるのかと問うている。それに対して、此の論は乗の本を明かすのであり、乗の本が若し成ぜば、乗の義も成り立つと云っている。つまり吉藏は、『十二門論』は、諸法実相という乗の本を明かしているから、大乘の乗の義が成り立つという考えに立って、この『法華玄論』や『大乘玄論』<sup>27)</sup>では、『十二門論』には乗に四事を具すといったのだと考えられる。そして、『十二門論疏』にもこれ以外に具体的な乗の四事の説明がないところを見ても、論自体に具体的に乗の四事を説いているものではないことが知れよう。

となると、『玄義』はここでも『玄論』の創作に關わる文章を、文字通り原典からの引用文と見做して、これを機械的に転写しているのである。両者を対校して見ると、『玄義』

は『玄論』を要略してそのまま援用していることがわかる。ただし、四の「乗果」が『玄義』では「乗至」に変わっているのが目立つくらいである。

## 五 結 語

以上見て来たように『法華玄義』巻第八上「弁体」第三章の第一「正顕体」の冒頭に出づる「出旧解」の項は、全篇が『法華玄論』巻第四（乃至巻第二）を下敷きとして、これに基づいて構成されたものであることが明らかである。このうち前半は旧解六師の説を紹介しているが、このうち三師までが『玄論』の吉蔵説であり、残る三師のうち二師までが『玄論』巻第二に相当文を見出すことができる。残る一師については『玄義』に甚だしい改変があったためか、或いは誤写等によるものか不明であるが、相当文を見出すことができなかつた。しかし、六師のうち五師までが『玄論』に拠って述べられているとすると、残る一師だけが別途の典拠によって紹介されたとは思えない。学説自体もきわめて有り触れたものであるので、『玄義』の諷意的な改竄が、曖昧ならしめたものと判断せざるを得ない。

本項が主として『玄論』の巻第四に拠っているにも拘らず、とくに冒頭の二師について、全く別途に巻第二にその資料を求めるなど、そのほかにも『玄義』に構成上の作意の跡

がうかがえることは文中に指摘した通りである。このことは第三者の「有人説」の紹介であるから、要略の形を取ることであっても、無理に表現を変えるなどの必要性は認め難いのであるが、『玄義』は敢えてこれを行なっている点と合せ考えても、『玄義』には、『玄論』を下敷きにし、全面的にこれに依拠したことを隠そうとする意図が働いていたとしか思われない。これは旧解六師に続いて旧訳五論による論証の際に、端なくも露呈することになるのである。つまり、『玄義』は、旧解六師の学説を紹介するときには、吉蔵乃至『玄論』の説であることは暖気にも出さなかつたにせよ、明らかに「有人説」であることは断っていた。しかし、五論による論証では、恰かも『玄義』自身の検索による論拠の呈示であるかのように説いていたからである。そのために、湛然はもとより、普寂までが、灌頂自身の加筆であると判定せざるを得なかつたのである。しかも、例えば『十二門論』の乗の四事がいい例であるが、全く原典にないものを、吉蔵が創作し、これを論の趣旨として述べたものまでも、論自体からの引用の如く扱っているのである。経論の引用については、手っ取り早く先人の業績を借用し、その示唆に基づくことはままあることである。問題は、『玄義』がそれを極力伏せているにも拘らず、『玄論』の吉蔵説を借り、これに全面的に依拠して「出旧解」全篇が書かれている点である。すでに前提したよ

うに、このような操作をなし得るのは、智顛ではあり得ず、

これが灌頂若しくは後代の人の手によってなされたことを明白に示すものである。しかるに『玄義』のこの頂では、このほかに、いわゆる「私謂」という灌頂の私記部分が随処に折り込まれている。そして灌頂は、ここにおいて何らかの論評を加えることによって、それが私記部分であって、他はすべて智顛の講説に基づく、いわゆる真説であるかの如き、印象を与えようとしているのである。しかし、われわれが本項の全篇を対校した結果、どこにも智顛の真説とおぼしきものは見当たらなかったのである。したがって、本書が、智顛の講説をそのまま灌頂が筆録したのでもなければ、智顛の講説部分という原型があって、別に灌頂がこれに私記を加えたというものでもないことは自明であろう。

本項は分量も少なく、「出<sub>二</sub>旧解<sub>一</sub>」という特殊な問題を扱った事項である。したがって、木を見て森を見ざるの類いがあることはならないことは厳に戒めなければならない。しかし、本項が「出<sub>二</sub>旧解<sub>一</sub>」という歴史的事情を扱っていることで、教義や理念の提示といった根本的な問題に比べれば、枝葉末節であると考えられるならば、それは、間違いである。教義や理念は、容易にこれを仮託することができる。しかし、客観的な文献や、歴史的眞実は、これは誤魔化することができないからである。

註

(1) 三大部の講説年時が、はじめて明確に示されたのは南宋の淳熙十二年（一一八五）に作られた戒応の「智者大禪師年譜事跡」で、法華玄義については「五十六歳。至<sub>レ</sub>荊答<sub>二</sub>地恩<sub>一</sub>。造<sub>二</sub>玉泉寺<sub>一</sub>。章安奉<sub>二</sub>蒙玄義<sub>一</sub>」（大正藏四六・八二三中）とあるに拠っているという。佐藤哲英『天台大師の研究』二九六頁参照。

(2) 佐藤前掲書、三一六頁参照。

(3) 同、三一七頁。

(4) 前述の引用はこの一文だけに留らず、後続の文章（大正藏三三・八一—中—八一—三上）もことごとく『玄論』から引用したものである。

(5) 例えば(2)の「釈蓮華」に関して『私記』巻第七に「玄他蓮華有<sub>二</sub>十六義<sub>一</sub>等者。是玄論中嘉祥自作<sub>二</sub>十六義<sub>一</sub>也。今引<sub>二</sub>十五<sub>一</sub>。更一義云。此華人天愛敬。喻<sub>二</sub>此經衆聖尊重<sub>一</sub>。問。既是嘉祥義。籤何云<sub>二</sub>通叙<sub>三</sub>諸師<sub>一</sub>（後略）」（日仏全書二一・二九四下）と述べている。文尾の『法華玄義釈籤』に対する非難は、湛然が『玄義』のいう「他師」が吉蔵であることに気付かず、諸師の説を紹介したと解したことに対する批判である。

(6) 普寂の『法華玄義復眞鈔』巻第五では、同じ蓮華の十六義に関して、「二引<sub>二</sub>旧解<sub>一</sub>。於<sub>レ</sub>中有<sub>二</sub>二<sub>一</sub>。今初叙<sub>二</sub>諸師<sub>一</sub>。私記有<sub>レ</sub>釈云云。十六義者。如<sub>二</sub>嘉祥玄論<sub>一</sub>二明<sub>一</sub>。斥意者。斥字<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>片。玄論所出与<sub>レ</sub>今異。如<sub>二</sub>私記弁<sub>一</sub>。蓋嘉祥已前已有<sub>レ</sub>作<sub>二</sub>此解<sub>一</sub>。可<sub>レ</sub>思。蓮畢華者。唐本無<sub>二</sub>畢字<sub>一</sub>。心<sub>レ</sub>正。釈籤云云。私記有<sub>レ</sub>抄可<sub>レ</sub>見」（日仏全書二三・一五三上）と述べている。これによ

って普寂は証真の『私記』を参照し、これに拠っていることが明らかである。

(7) 前註(6)参照。

(8) 佐藤前掲書三一七一—三二三頁参照。

(9) 例えば『玄論』では「第十師云。以三万善<sub>二</sub>為<sub>レ</sub>体」(大正蔵三四・三八〇下)とあるものを『玄義』は「有言。万善為<sub>レ</sub>宗」(大正蔵三三・七九五上)といている。

(10) 「宗体一異」について『玄義』巻第九ノ下に「今言。不異而異。約<sub>二</sub>非因果<sub>一</sub>而論<sub>二</sub>因果<sub>一</sub>故。有<sub>二</sub>宗体別<sub>一</sub>耳」(大正蔵三三・七九四中)とある。

(11) 『法華義記』巻第一「是故比經家要双明<sub>二</sub>一乘因果<sub>一</sub>。似<sub>二</sub>若此花<sub>一</sub>」(大正蔵三三・五七三上)

(12) 『十二門論』「觀四諦品」第一に「諸仏大人乘<sub>二</sub>是乘<sub>一</sub>故名<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>大(中略)又觀世音。得大勢。文殊師利。弥勒菩薩等。是諸大士所乘故。名為<sub>レ</sub>大」(大正蔵三〇・一五九下)とあり、本來は、何故「摩訶衍」と名づくるかの答である。

(13) ここは「方便品」第二「仏自住<sub>二</sub>大乘<sub>一</sub>。如<sub>二</sub>其所得法<sub>一</sub>。定慧力莊嚴。以此度<sub>二</sub>衆生<sub>一</sub>」(大正蔵九・八上)と「譬喩品」第三「与<sub>二</sub>諸菩薩及声聞衆<sub>一</sub>。乘<sub>二</sub>此宝乘<sub>一</sub>。直至<sub>二</sub>道場<sub>一</sub>」(大正蔵九・十五上)の二文を合せて引いたものである。

(14) 『摩訶般若波羅蜜經』巻第五「広乗品」第十九(大正蔵八・二五三中—二五六中)の取意で、経にはすべて「以<sub>二</sub>不可得<sub>一</sub>故」と結んでいる。

(15) 「方便品」巻第二「或有人礼拜。或復但合掌。乃至举一手。或復小低頭。以此供養像。漸見無量仏」(大正蔵九・九上)

の取意。

(16) 『大智度論』巻第五三「積無生品」此中仏説<sub>二</sub>遠道<sub>一</sub>。所謂六波羅蜜菩薩道也。近道所謂三十七品菩提道也」(大正蔵二五・四四〇下)

(17) 『摩訶般若波羅蜜經』巻第七無生品第二十六「菩薩摩訶薩云何行<sub>二</sub>六波羅蜜<sub>一</sub>時。淨<sub>二</sub>菩薩道<sub>一</sub>。須菩提言。有<sub>二</sub>世間檀那波羅蜜<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>出世間檀那波羅蜜<sub>一</sub>。尸羅波羅蜜。羼提波羅蜜。毘梨耶波羅蜜。禪那波羅蜜。般若波羅蜜有<sub>二</sub>世間<sub>一</sub>。有<sub>二</sub>出世間<sub>一</sub>」(大正蔵八・二七二上—中)

(18) 現行大蔵経には四列とあるも、刊本には四例とあり、四例の方が妥当である。

(19) 『大智度論』巻第四六「釈摩訶衍品」第十八に「六波羅蜜是摩訶衍体」(大正蔵二五・三九五上)とあるのが引用の主旨で、慈悲と方便の二は大乗の狭具であるという『玄論』の文章は全くの取意であろう。『玄義』ではこれを省いている。

(20) 「譬喩品」第三「有<sub>二</sub>大白牛車<sub>一</sub>。肥壯多力。形体殊好。以駕<sub>二</sub>宝車<sub>一</sub>。多諸僮從。而侍<sub>二</sub>衛之<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>是妙車<sub>一</sub>。等賜<sub>二</sub>諸子<sub>一</sub>」(大正蔵九・十四下)

(21) 『法華玄義復真鈔』巻第五に「一正顕体至亦非乗体。二随釈七中。第一正顕<sub>二</sub>経体<sub>一</sub>。初開章後随釈。釈中有<sub>レ</sub>四。初出<sub>二</sub>旧解<sub>一</sub>中<sub>二</sub>。今初出<sub>二</sub>六師<sub>一</sub>。嘉祥玄論第二。広出<sub>二</sub>諸師所説<sub>一</sub>。宗体可<sub>レ</sub>尋」(日仏全書二三・一五八上)といて具体的な文脈を指示することもなく、また巻二だけを指示し、「可尋」といっている。

(22) 同、「中辺分別至仏所乗。二章安引<sub>二</sub>五論<sub>一</sub>分科可<sub>レ</sub>知」(一五八

上)

- (23) 『法華玄義釈籤』卷第十六に「從<sub>二</sub>中辺分別論<sub>一</sub>去。章安引<sub>二</sub>五論<sub>一</sub>。以出<sub>二</sub>乘体<sub>一</sub>」(大正蔵三三・九三一下)とある。
- (24) 般若流支訳一卷(大正蔵三一・六三、No. 1538)唯識論・大乘楞伽唯識論ともいう。
- (25) 吉蔵の著作ではこの『法華玄論』のほかに『中観論疏』巻第五本にも「唯識論及撰大乘明<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>外境<sub>一</sub>」(大正蔵四二・七四中)とあり、『大乘玄論』巻第三「一乘義」(大正蔵四五・四二中)にもある。宇井伯寿博士は、吉蔵の著作中に現在欠本の真諦作『唯識論』が引用せられていると指摘している。
- 『印度哲学研究』巻第六、一〇九―一一一頁参照。
- (26) 註(12)参照。
- (27) 『大乘玄論』巻第三「一乘義」に「十二門論云。乘具<sub>二</sub>四事<sub>一</sub>。一者乘本。謂諸法実相。二者乘主。由<sub>二</sub>波若導<sub>一</sub>万行得<sub>レ</sub>成。三者乘行。余一切行。四者果。謂薩婆若」(大正四五・四二下)とあり、『法華玄論』の「乗助」が「乗行」に変わっているだけで、他の三つは同じである。ただし、説明は簡単になっている。